162）未成年の看護学生の飲酒状況とその親の飲酒問題との関連－CASTとAAISを用いて－

鳥山絵美，森　千鶴（筑波大学大学院）
菅沼真由美（山梨大学大学院医学工学総合研究部）
佐藤みつ子（帝京大学）

【目的】
大学生になると未成年であっても飲酒する機会が増え[1]。看護学生は健康行動に関心を持ち，ある程度の知識も備えている看護学生の飲酒行動がどのようなものか把握し，その親の飲酒状況との関連を明らかにすることを目的とした。
【方法】
対象者は看護学生で，調査内容として青少年の飲酒状況を知るスケールAAIS[1]と，親の飲酒問題についてのスケールCAST[2]と，独自の質問項目を用いて調査を行った。AAISでは，合計点が０点を“禁酒群”，１～19点を“たまに飲酒する群”，20～41点を“飲酒をしているが問題の少ない群”，42点～57点以上を“問題飲酒群”とした。CASTでは，０点を“親の飲酒問題なし群”，１～５点を“親の飲酒問題あり群”，６点以上を“親が依存症である群”とした。分析は各項目を集計し，相互の関連を明らかにした。倫理的配慮：対象施設に研究の趣旨を説明すると同時に調査に関する倫理的妥当性を検討してもらった。対象者である看護学生には，研究の協力は任意であり，研究に協力をしなくても不利益になることはないことを文書と口頭で説明を行い，中断が可能であることを保証した。
【結果】
看護学生101名のうち，20歳未満の者82名（81.1％）を分析対象とした。対象者の年齢は18.4±.65歳，女性76名（92.7％），非飲酒者は27名（32.9％）であった。「あなたはお酒をどのくらいの頻度で飲みますか」の項目において，「のまない」と答えたものは“親の飲酒問題なし群”39.4％，“親の飲酒問題あり群”21.4％，“親が依存症である群”66.7％で，“親が依存症である群”の非飲酒割合が大きかった（χ^2=19.3p＝0.004）。また，「月に１回以上」と答えたものは“親の飲酒問題なし群”42.1％，“親の飲酒問題あり群”57.1％，“親は依存症である群”25％であり，“親の飲酒問題あり群”で，月に１回以上飲酒する割合が大きかった。
【考察】
非飲酒者は32.9％で，高校生と同程度の割合を示しているが，対象者は健康について知識がある看護学生であっても，未成年での飲酒は68.1％であった。親に飲酒問題がある子どもは未成年時から飲酒をする傾向にあるが，親が依存症のこどもは，未成年であるためか飲酒を制限している傾向が認められた。親が依存症である場合，子どもも依存症になる場合が多いとの指摘もあることから，単に知識を提供するだけではない啓蒙活動の必要性が示唆された。
【文献】
１）久根木康子（1995）．高校生・大学生におけるエタノールパッチテストとAAISとの関連について．慶應保健研究，13（1），50－55.
２）山崎茂樹（1996）．CAST（Children of Alcoholics Screening Test）日本語版と親の飲酒が子供達に及ぼす影響．日本公衆衛生誌，43（12），1045－1054.